

世界遺産への思い入れとアプローチ

近藤 節夫

出るぞ！ 出るぞ！ と思っていたらついに出た。

「世界遺産検定」と称して世界遺産に関する知識を広める目的で、実施されることになった世界遺産知識検定試験である。高邁な理想や、基礎知識の普遍化を図るという意図は理解出来るにしても、商業ベースに則っている感じがあってどうも素直に馴染めない。

2005 年に設立されたNPO「世界遺産アカデミー」なる組織が、ユネスコ事務局長のメッセージを掲げ、著名な学者や元大臣のお墨付きを得て、関連のテキストを次々に発行し、セミナーや講座を開いて事業？を伸ばし、昨年初めて念願の「世界遺産検定」を実施した。

しかし、これは本筋からちよつとずれているのではないかと思うのは筆者だけの思い過ごしであろうか。世界遺産は部屋の中で机に向かい、ひたすら知識を詰め込むような受験勉強の対象に当るようなものではないと思う。事前に学んで気持ちを高揚させ、自分の足で現場を訪れ、本物に触れて、感激を味わってこそ世界遺産の本質を知ることになる。それこそが臨床(場)学である旅のひとつ、世界遺産の極意ではないだろうか。

私見を述べれば、まず自分が見てみたい好きな世界遺産を心の内に決める。それをある程度学んだ後に、自分なりのこだわりを持って憧れの世界遺産を訪ねてみるとよい。臨場感の伴わない「世界遺産」なんて、所詮テレビで観る「夏の夜空の花火」にしか過ぎない。

こと「世界遺産」に限っては、受験勉強的に広く浅くというより、間口を絞って主観的に深くアプローチする方が理に叶っていると思うし、どちらかと言えばその方が好きだ。

筆者は、まだ世界遺産制度が発足する以前から、作家小田実に影響され、アクロポリスの丘に恋焦がれ、初めて訪れた時には朝な夕なに界限を歩き回り、アクロポリス夜景鑑賞に絶好の角部屋に泊まり、ホテルの窓から眺め続けていたものである。

いままた新しい目標がある。近いうちにチベットのポタラ宮殿を仰ぎ見てみたい。